岐阜経済大学論集 32 巻 4 号（1999 年）

市民の力の獲得と人間解放の政治学（上）

河　合　恒　生

〈人格と物象化〉
1. 個性・個人・自我
2. 個人の確立
3. 大工業と事物的依存関係
〈市 民 社 会〉
1. イデオロギッシュな市民社会
2. 市民社会と階級
3. 新中間層と市民
4. 新中間層の市民運動
5. マルクス主義と民主制　……（以上，本号）
〈人権と民主制〉
1. 市民社会の政治性
2. 人間性回復と人権
3. 資本制社会と人権
4. 民主制の諸形態
〈力の獲得：人間性の開花と人格の解放〉
1. 市民の力の剝奪
2. 市民の力の獲得

〈人格と物象化〉

1. 個性・個人・自我

芝田進午の『人間性と人格の理論』[1]は，人間性と人格の形成からその疎外形態，そしてその解放にいたるまで，マルクス，エンゲルス，レーニン等の方法を独自に理解したうえで構築した実践的唯物論の立場から一貫して論じたきわめてユニークな成果である。「社会主義」が崩壊した現在，人間の解放という問題が曖昧にされ，それを市場にまかす以外に方法がないかのような主張がまかり通っている。左翼のなかでも人間社会の将来への展望が失われ，人間の解放のためには市場経済によりながら，トリックルダウン効果に期待するあきらめの主張が幅をきかしている。このような時期に，芝田の成果をふまえて，人間性と人格の解放をどのようにとらえるべきか，理論的に再検討するのも意味があろう。

芝田の人格論の核心は労働と人間性の関係にある。労働は人間性を形成する唯一の原動力である。そして労働の技術的過程と組織的過程は人間の肉体的ならびに精神的能力の無限の発展を可能にする。この人間性の具体的現実存在，すなわちこれらの諸能力の担い手が「人格」なのである[2]。人格は肉体的能力だけでなく，精神的能力をも含む両者の統一であり，労働をつうじて肉体的・精神的諸能力の総体を発展させる。ひとたび形成された人格は，労働力の発現によってみずからを実現し，労働においてみずからを再び実証する。このように人格を一つの過程，諸関係の総体としてとらえる。芝田は「人格形成の要因として，素質，環境の他に実践をもあげなければ」ならないとする。この三つの要因のうちで実践こそ決定的役割をはたすのである[3]。

この人格は三つの発展段階をたどる。第一段階は原始共同体で，自然成長

的「人格的依存関係」の支配する段階である。労働の技術的過程も組織的過程も自然発生的で，種々の個人への労働の分割も生まれていない。だから「個人」も生まれていない。かれらは調和のとれた人格を持ってはいたが，個性を持たず「平均的悟性」しか持っていない。

第二の段階は階級社会である。生産力は労働の分割とともに発展する。生産と所有の分裂とともに，人間が生産物を所有するのではなく，生産物が人間を所有するようになる。諸個人が分化し，交換によってのみ結びつけられる。人格的依存関係から事物的依存関係への転化が生じ，人格の分裂と疎外が一般的となる。

しかし，交換価値を基礎とする生産は，個人の無限の分化を促進し，ここから，人格の喪失と比例して，個性の無限の多様化が不可避となる。それは実は商品の論理の貫徹にほかならず，現象的にはともかく，本質的には規格化，画一化，平均化である。

他方，労働の技術的過程は無限に高度となり，組織的過程も無限に拡大・集中されて，生産力は無限に発展し，「普遍的社会的質量転換，普遍的関係，全面的欲望，普遍的能力の体系」が形成される。こうして生産力の発展が人格の回復とその全面的発展，個性の全面的開花を要求し，後者がさらに前者の一層の発展をうながす。この矛盾が「事物的依存関係」と敵対関係におちいる。こうして第二段階の胎内に第三段階の無階級社会の形成の前提条件が形成される。

長期の過渡期を経て第三段階の共産主義社会では，再び「人格的依存関係」がより高度の次元において復活され，事物ではなく，人格が生産過程を支配する。そこでは個人の普遍的発展が可能となり，無数の自由な個性が形成される。この段階ではじめて，人間性の全面的発展，人格と個性の統一が可能となる[4)]。

この芝田の主張の大筋には同意するが，人格と事物的依存関係，人格の疎外とその解放をめぐる問題点を提示してみたい。

芝田は，原始共同社会で人間は調和のとれた人格を持っていたが，個性を持たず，「平均的人間悟性」しか持たなかったと言う[5]。

芝田は，人間はもともと個人であったのではなく，また自我を持っていたのでもないとし，「単純な，個別的な，あるいは偶然的な価値表現が何億回，何兆回となくくりかえされる過程で，はじめて人間は他の人間という鏡に自己を映してみることができるようになったのであり，この廻り道をすることによって，はじめて『個人』となり，また『自我』意識をもつようになったのである。」[6]とする。

芝田は，人間が個人になる過程を価値形態論から論じる。二つの商品の関係という外的対立のうちに，商品のうちに包み込まれている使用価値と価値の内的対立が表示されており，それは具体的・個別的労働と抽象的労働の対立の現象形態である。この対立が一人一人の人間に刻印されて，人々はすべて「個性」と「同等性」という対立物の統一として形成されると芝田は言う[7]。

一方，浅見克彦はマルクスの「個性」＝ individualität の概念について，次のように主張している。

「労働者が客体的生産条件を意志的に支配することで，生産物を領有し，もって自己を再生産する事態において，自己の存立根拠の獲得（主体性）に裏づけられた現実的主体性，自立性（これは孤立性ではなく文字通り自らの存立根拠を自ら支配している状態である）を有していること」[8]。

さらにマルクスは，階級社会から解放された高度な社会においては「労働者の意志的支配行為に基づく主体と客体との統一に，人間が現実的・実質的に自立的個人としてあること」を「個性」ととらえ，この状態を実現する所有形態を「個人的所有」（individuelles Eigentum）と呼んだと浅見は指摘する[9]。これは疎外された人間の解放をいかに考え，いかに実現するかということとかかわる重要な指摘である。

芝田の「個性」概念は，浅見がマルクスのものとして明らかにした個性概

念とは明らかに異なる。商品交換に規定されて生じたとする芝田の「個性」概念は，諸個人の社会的関連の物象化にもとづく「個性」であることがわかる。芝田は「個性」と「自我」とを同義語として用いている。しかし物象化に支配された意識にたいしては「自我」のほうが適切な用語であろう。そしてマルクスの言う Individualität こそ，芝田の言う「人格」である。芝田は，「個人」が「自我意識」＝「個性」を持つようになるとすることによって，原始共同社会の人間の「個性」を否定的に見ることになる。

さらに芝田は単純な商品交換の段階で，人格は個性と抽象的人間の対立物の統一として形成されるとする[10]。

すでに分業が十分に発展した段階での単純な等価交換を考えてみよう。単純な等価交換では甲の持つ物Ａ＝乙の持つ物Ｂと表現される。交換の場で対峙する甲乙両者は使用価値ＡとＢを相互に等価交換したと意識している。かれらは自分の持つ使用価値を単純な価値形態の関係に置いたのである。

交換の当事者相互は，相手の所有する物を誰が作ったかはともかくとして，それぞれが占有する物を交換していると認めあっている。交換者たちが相手の持つ物をみずから生産した物ではないとたとえ知っていたとしても，前もって誰かが生産した物と等価交換し，相手が占有していると意識する。それほど日常的に「みずから働いて得た財産」[11]の等価交換がおこなわれている。この場合「みずから働いて得た財産」という意識は所有権意識ではない。まさに自分の，あるいは自分たちの日常的労働の生産物を占有し，互いに交換していると意識しているのである。しかし現実には，「対象化された労働である価値」＝「商品」の譲渡によってかれらは占有を根拠づけている。

交換において甲はＡを相対的価値の位地に置いたのであり，乙はＢを等価物としたのである。逆から見れば，Ｂが相対的価値であり，Ａが等価物である。お互いに購買者と販売者になっている。かれら二人の意志がどうあろうと，二人は物Ａと物Ｂを価値物として同値してしまったのである。

結果として自分の物と相手の物を同じ物だと相互に認めあった。つまり二

人が交換した二つの物には「同等な人間労働」あるいは同じ量の「抽象的人間労働」が含まれていると無意識のうちに相互に承認しあったのである。

具体的労働でしかありえないものを抽象的労働とみなす行為を相互に無意識のうちに承認しあったということである。

こうして二人は意識せずに，行為において，自分の労働と他人の労働は「抽象的人間労働」として同等であり，量的に計ることができる関係であると意志表示しあっている。

以上のことから単純な商品交換の段階で，人格は個性と抽象的人間の対立物の統一として形成されるとする芝田の主張の問題点が明らかになる。

人格は個性と抽象的労働の統一として形成されるのではない。この段階で交換する人間たちは他人との違いを意識する「自我」意識にめざめるのである。しかしそれは，私的諸労働としての分業にもとづく社会における疎外された人間としての「個人」の出現でもある。人格の疎外と分裂の始まりである。単純な商品交換とは，さまざまな生産労働を現実的「同等性」の関係に置くことである。実践のなかで物を媒介にして「同等性」を無意識に表現する。生産物を媒介にして人格を同値する。これは，人格が個性と抽象的人間の対立物の統一として形成されるのではなく，人格を物と同値することによって，抽象的人間とみなす関係行為が人間社会のなかで実現するということである。人間と人間の関係が事物的関係に転化し，相互に相手を抽象的人間とみなす関係が発展するということである。

人格が分化し，疎外された「個人」に転化し，それが自我意識を持つ。それは，労働過程を主体的に制御する人格の個性の発展ではなく，労働過程の主体的制御能力を喪失しはじめた人格の「個人」への転化であり，人間性と人格の喪失であり，事物を媒介にして，お互いの個性を否定する同等性の関係である。

「自我」を持つ個人そのものは商品交換によって形成された。「自我」は人格的依存関係から事物的依存関係への移行とともに形成された。人格の疎

外，つまり個性をそだてる土台の喪失と「自我」意識を持つ個人の発展は同時進行した。

こうして等価交換という物と物との関係を創り出して，その関係が人間と人間の関係に与えた新しい変化の内容を人間たちは認識していないのである。マルクスが言うように，人間は「それを知ってはいないが，しかし，それをおこなう」[12)]のである。相互に非人間化の関係を維持することによってのみ，自我を確立できる。しかし，それは個性の喪失の過程でもある。本源的共同体が解体され，人格を喪失し，「個人」が成立することは個性の喪失であって，個性の発展ではない。「自我」意識の獲得と個性の発展とは同一ではない。やがて貨幣が生じ，資本が生じることによって，「自我」は「個人」の「同一性」の関係をおもいしらされることになる。

2. 個人の確立

芝田は，全体的な，または展開された価値形態において，人格の疎外について論じる。しかしこれまで述べた問題点との関連で，自我の成立，個性の分化とその範囲の拡大およびその人格の疎外との関係が今一つ曖昧である。

人間たちは，展開された価値形態の段階で，物には「固有の使用価値」と「交換価値」という二つの使用価値があると理解する。等価交換をつうじて人間は自分で自分の労働を「抽象的労働」とみなした。生産物を「抽象的労働」の産物とみなし，それを「生理的エネルギー支出」の抽象的労働と混同し，後者の支出時間で前者の労働量を計り，それによって比較するような矛盾した商品関係を自分たちで創り出しながら，その矛盾に気づかずにいる。

その結果，自分で物を価値物として扱うことになっているにもかかわらず，価値物を価値物としては見ることができない。物を交換する行為を繰り

返しているうちに，物には一定の基準で他のものと交換される価値，つまり交換価値がもともとそなわっていると見る。こうして商品は他人の必要とする「使用価値」と「交換価値」という二つの使用価値を持つと錯認する。交換の発展は，人間の関係を事物的依存関係に，よりいっそう転化させる。

芝田は全体的な，または展開された価値形態と人格の疎外の関係を論じておよそ次のように言う。

第一に，労働生産物の商品への転化の無限の過程は，交換価値と抽象的人間的労働の発展の過程であり，商品においては使用価値と交換価値，人間においては個性と抽象的人間の対立物の統一をなしている。そこでは交換価値が自己目的になり，使用価値はその単なる手段とされ，「抽象的人間」のみが礼拝され，個性ないし具体的人間はその単なる手段に転落させられている。「商品生産は個性の発展と分化を必然たらしめるが，交換価値はみずからのなかで一切の個性と特性を否定し，消失せしめる。すなわち商品生産社会は，人間を真の個性として形成することができない。」

第二に，商品形態は，人間自身の労働の社会的性格を労働諸生産物そのものの対象的性格として，またこれらの物の社会的な自然諸属性として，人間の目に反映させ，したがってまた総労働にたいする生産者たちの社会的関係を，かれらの外部に実在する諸対象の社会的な一関係として，人間に反映させる。かくして人格と人格との直接的に社会的な関係は，人格と人格との「事物的諸関係」および「諸事物の社会的諸関係」として現象することになる[13)]。

ここではじめて人格の疎外と物象化の関係を芝田は論じている。しかし，物象化は単純な交換の段階ですでに生じていた。この段階では物象化がさらに深化するのである。人格の疎外の一層の進行と言ってよい。

普遍的価値形態の地位を占める物自体が商品である。商品交換により労働の価値を抽象的人間労働の量に置換・還元する行為を長い間，繰り返してきた結果，つまり「商品世界の共同事業」として金が普遍的価値形態の地位を

占めた。金は一つの商品であるにすぎない。ところが市場の人間たちは普遍的価値形態にある金を商品と認識せず，これを貨幣と認識する。金は生まれながら自然的属性として貨幣であると認識する。つまり金は装飾品としての使用価値を持つと同時に，貨幣としての使用価値も持っていると認識する。貨幣はさらにさまざまな使用価値を持つ。第一に価値の尺度および価格の度量基準として役立つ。第二に流通手段として役立つ。支払い手段としても役立つ。流通手段としての貨幣の機能から人間は鋳貨姿態を生みだす。ここでも人間たちは貨幣を使用価値の観点から認識し，概念化し，実体化するのである。

具体的有用労働の相互的関係は貨幣での取り引きにおいて一般的には目に見えない。「みずから働いて得た財産」を所有し，売買しているという関係がいっそう背後に退いていく。貨幣所有者は「絶対的に譲渡されうる」貨幣を持っているのであり，「自己労働にもとづく所有」という意識を希薄化させてしまう。それさえあればいつでもなんでも買えるという自然的属性を持つ使用価値，つまり貨幣を所有しているのである。貨幣は「自己労働にもとづく所有」という所有の根拠を失い，貨幣の所有権として，私有財産の不可侵として，法的な権利として保障されるしかないのである。

そしてこの貨幣の所有権を土台として現実の経済関係が回りはじめる。

「貨幣の運動はただ商品流通の表現でしかないのに，逆に商品流通がただ貨幣の運動の結果としてのみ現れる」ということになる[14)]。貨幣の運動として，大勢の商人の仲介運動として生産活動が大規模に展開されるようになる。このような運動の展開される社会の人々は，生産物が販売された先でどうなるかを知らない。生産者たちはかれらの生活圏の総生産にたいする支配を失い，生産物とその生産は偶然にゆだねられる。人間の手におえなくなった人間の活動が貨幣と商品の自然必然性をもってするかのように，諸法則は偶然性のうちに自己を貫徹する。個々の生産者や交換者には，それは外的な，さしあたり認識もされない力として，この法則は相対する。生産物が生

産者を支配する。人間は自分でこのような関係をつくりだしておきながら，貨幣がこのような関係をつくりだしていると意識するのである。

人格的な関係が「冷酷な法」の関係に変わる背後には，このような物象による人間の意識の支配がある。

貨幣が人間生活に入り込んでくると，あらゆる物の価値を貨幣で計る習慣を人間たちはしっかりと身につけていく。貨幣の発展はそれさえあればなんでも買えるという意味で，個人の無限の発展を可能にするように見える。しかし，一方で人間たちは，人間そのものの価値を貨幣で計る。これは人間の一切の個性の否定である。

また貨幣は人間の個性を偏在させる。金持ちはあらゆる個性を買う。個性を買うことができないものは個性を喪失した貧困層として社会の底辺に蓄積される。

一方，商品取り引きは必然的に売るために買う行為を生みだす。この取り引きでは貨幣が貨幣を生むように現象する。増えた部分はさしあたり「もうけ」と理解される。この「もうけ」が「剰余価値」であることを解明して見せたのはマルクスであった。この剰余価値の源泉は商品として売買される「労働力」であることも明らかにした。「もうけ」を生みだす貨幣を人間は「資本」と概念化した。

一定の生産力の発展段階で生産手段から切り離された「裸の個人」は，貨幣と生産手段を持つ個人のもとで一定の時間の労働をし，賃金を獲得して生きていくことを余儀なくされた。この関係が成立する過程で貨幣は資本に転化した。

芝田は「資本」は物ではないと言う。貨幣と同じように「関係」であり，人間の一定の社会的生産関係であって，資本家はこれらの社会的生産関係の人格化にすぎない。他方，賃金労働者は，自己の商品を自由に処分しうるという点では「人格」であるが，「そのばあいかれの商品たる労働力すなわち人格を時間ぎめで販売することによってのみ『人格』でありうる。」[15] この

ように芝田は言う。

しかし資本は物としても現象している。貨幣として，その姿を現実化している。また資本家だけが社会的生産関係の人格化，つまり資本の「人格化」であるのではない。賃金労働者も資本関係の「人格化」である。

芝田は「労働力の価値」と「人格の価値」を同一視する[16]。

しかし，人間を商品として取り引きする生産関係のなかでのみ人間は「労働力」として現実化する。それは貨幣で現実に計られる。そこでは人格は疎外される。人格は，技術的にも組織的にも労働過程から「裸の個人」としていったん，完全に切り離される。これはまさに「人格」の喪失である。人格の喪失と引き替えに「裸の個人」は「抽象的人間労働」の担い手である「労働力」として現象する。資本関係は人間を「労働力」として物象化する。労働力の売り手は確かに他人の人格に全く依存しない自由な「個人」である。ここではじめて人間たちはその「同等性」を相互に認識しはじめる。

「労働力」商品所有者は資本の物象化の世界でのみ存在する。そこでは「労働力」商品所有者も自由な所有者とみなされる。しかしかれは自分の労働にもとづく成果の所有者であることはできない。労働力を処分する意志だけが人格とされ，そのような人格として労働力の「自由な所有者」とされる。そこでは人格から切り離されて「労働力」が譲渡可能であるかのように現象する[17]。まさに人格の疎外である。

一方，賃金労働者は労働力を売るとは意識しない。一定の時間の労働を売っていると意識する。現実には自分を「抽象的人間労働」の担い手として，計量可能な「労働力」商品として行為しているにもかかわらず，賃金労働者は「具体的」労働を一定時間提供して，その代価として賃金を受け取っていると感じている。資本家の側も「抽象的人間労働」を「労働力」として買っているのであるが，具体的企業を経営して，一定時間の「具体的労働」に賃金を支払っていると感じている。

賃金での生活は「労働力」の再生産である。「生活領域」も「労働力」の

再生産の場として資本関係のなかにしっかりと組み込まれている。しかし，賃金労働者は自分を「労働力商品」とは思っていない。労働者つまり「一人の人間」と感じている。生活領域も「労働力商品」再生産の場ではあるが，労働者は人間としての生活の場と認識する。生活領域においてそれぞれに役割を与えている関係は本来，価値的ではない。たしかに生活領域の父，母，夫，妻，子供等々の役割概念は価値概念ではない。しかし，それぞれ労働力商品あるいは過去・将来の労働力商品として存在することも事実である。母は労働力商品再生産の必要物としても存在している。生活領域も価値関係に包摂されている。しかし，父も母も，夫も妻も，生活領域の人間は自分たちの関係を価値関係としては認識しない。お互い人間として個性的に人格的に結合されていると理解する。

人間は，資本関係に包摂された生活領域の現実をあるがままに見ることができない。しかも賃金労働者は賃金で使用価値を買う。その使用価値の所有は，まさに自分の労働にもとづく所有として，「私有財産」意識の強固な基盤になる。労働力の再生産の素材を自分の労働にもとづく所有と転倒して意識する。

以上のことからわかるように，マルクスが「労働力の価値」と言う場合，物象化された世界の「価値」概念を意味している。その観点から「労働力の価値」はなにによって決まるかを明らかにした。それと人格の「価値」とを区別すべきである。人格に「価値」を使うと誤解をまねく。なぜなら「価値」という概念自身，物象化された世界で混乱して使われているからである。「人格の価値」は物象化から解放された「人間の価値」であり，それは貨幣を度量基準にしては計りえない。労働する者は資本関係からみずからを解放してはじめて，労働過程をみずから支配し，労働生産物を本来の意味で所有することができる。このもとで人格の全面的発達が可能になる。また資本は「労働力の価値すなわち人格の価値」[18]をできるだけ引き下げるのではない。労働力として物象化した「人格」の貨幣で計算可能な「価値」をでき

るだけ引き下げるのである。そこでは「人格」は自分の意志で労働したり，自分の生産物を所有することはない。

したがって労働者と資本家の階級闘争は「人格の価値」を高めるか，低めるかの闘争ではない[19]。「人格」を「労働力」とする資本関係から「人格」を解放する闘いが階級闘争である。それは労働過程を労働者自身の支配下にとりもどし，芝田の言う「人格」を全面的に発展させる闘いである。

3. 大工業と事物的依存関係

貨幣で労働力という特殊な商品を購入し，それを労働過程で消費して，商品を生産し，販売することによって，剰余価値が生じることをマルクスは解明した。この労働過程がやがて大工業生産様式へと発展する。人間性と人格の発展にとって大工業のはらむ問題性をより鮮明にするため，芝田は資本主義的側面を捨象して取り出した大工業の技術的過程と組織的過程の特徴をとらえる。そのうえで大工業の資本主義的形態の特徴をとらえ，一般的概念としての大工業とその資本主義的形態の矛盾を論じる[20]。

この分析的方法の結果，芝田は資本主義的大工業と資本の物象化との関係を明確に提示しえていない。

資本関係は，労働者が労働実現条件から分離されることを前提する。人間社会は生産力の一定の発展段階で，多数の「裸の個人」をつくりだした。一方に大量の「裸の個人」を生みだす社会的力が働き，他方でこれを賃金労働者として労働させる社会的強制力が働くことにより，「社会的な自覚的承認なしに客観的必然として」「階級的所有関係」が形成される[21]。この関係はまさに搾取するものと搾取されるものとしての階級関係である。法的関係ではない。これを土台にして事物的所有権の法的関係が現れ，市場を媒介にした事物的依存関係としての資本関係が現象する。

事物的所有権の法的関係の土台に，搾取と被搾取の階級関係が存在するこ

とを資本の本源的蓄積の時代ははっきりと証明している。

このようにして成立した資本制生産では，労働過程に一般的な指揮労働は資本家の意志的支配下に置かれ，「資本の指揮」となる。やがて機械が生みだされ，自動機械体系が機能しはじめ，大工業生産様式が支配的になる。労働過程は労働者にとって，外的に自立した既成の物質的生産条件として，機械，自動機械体系として，大工業生産様式として物化・物象化して現れる。労働過程そのものの「自然的必然性」であるかのように資本主義的大工業は直接に具現する。「資本の指揮」が機械体系としての労働過程そのものとして現象する。

労働者は生産過程で全体的依存関係に置かれ，労働者相互に労働を強制するように現象する。労働者諸個人が生産の全体機構へ従属する関係として現れる。それは資本家への労働者の従属という人格的な権威・服従の関係ではなく，労働組織そのものの秩序への労働者の従属のように現象する。「資本の指揮」が物象としての機械体系に包摂されて現れ，資本家はただ機械の所有者として労働過程の外に現れる。

階級的支配－従属関係が物化・物象化することにより，生産関係は生産一般の自然的・技術的必然として現れるので，資本家がなんらかの活動をするとしても，かれの行為は労働過程一般の労働のごとく現象する。労働は一般的労働過程の管理・監督・監視・制御労働として現象するが，すべて資本の機能を遂行する労働なのである。

物象化に支配された意識には，生産手段の所有者として資本家が存在し，それに雇用された労働者が存在することになる。そして管理・監督労働だけが資本の機能の代行者に見え，管理・監督労働者を労働者階級にいれるべきか否かというような議論になる。資本が物象をつうじて事物的依存関係のシステムとして現象し，一方に，資本の法的所有権者を現象させ，他方に資本の物象化としての大工業生産様式を現象させているのである。生産条件が機械体系として外化され，それを機能させることが人間の役割になる。生産条

件を機能させることによって，搾取のシステムは機能する。あたかも大工業生産様式の自然必然性でもあるかのように剰余価値は生みだされる。労働過程の外に現れた資本の所有権者としての資本家だけが搾取しているわけではない。社会的生産過程全体が機能することによって自然必然性でもあるかのように搾取が実現する。株式会社が支配的な社会で，この物象化は完成に近づく。

しかも芝田が指摘するように大工業の労働過程は科学・技術革命の過程である[22)]。価値増殖過程は科学・技術革命の過程として現象している。この過程そのものが，資本と労働の階級的敵対的支配－従属関係の物象化なのである。

科学・技術革命の過程そのものが自然必然性として搾取を実現しているかのような現実を，搾取のない関係に変化させるためには，科学・技術革命の過程を資本の物象化としての資本関係から解放し，人間的生産・生活活動に変革しなければならない。

この問題について，芝田は資本主義的大工業の胎内における資本と人間性の矛盾に注目する。資本主義的大工業の技術的過程と組織的過程が人間性と人格を疎外する。さらに両者は統一して，資本主義的大工業と他の資本主義的生産様式は敵対的に矛盾するようになる。そしてこれら全体が資本主義的大工業の内的矛盾を激化させる。こうして資本主義的大工業はすべての人民の人格を破壊する。しかし資本主義的大工業の発展そのものが自己を止揚せざるをえない矛盾をはらんでいると言うのである。

それは生産の社会的性格と所有の私的性格との矛盾，工場内分業の計画性と社会的分業の無政府性との矛盾である。さらに資本は普遍的生産に，より多くの努力を傾ける。その結果，価値法則の作用する範囲をますますせばめる。直接的労働は量的にわずかの比率まで減少させられ，富の主要な源泉であることをやめる。こうして労働時間は富の尺度であることをやめ，交換価値が使用価値の尺度であることをやめざるをえなくなる。生産力が価値法

則・剰余価値法則の止揚を迫っているのに，資本は価値法則・剰余価値法則を維持しようとする。これは矛盾であると芝田は言う[23]。

芝田によると，この矛盾のなかで，人間による「普遍的生産力」の獲得と「社会的個人」が発展するのである。一方，資本はそのような発展を価値法則の限界内に押し込めようとするのである。

芝田の言うこのような「社会的個人」の真の発展のためには，科学・技術革命の過程と化した労働過程を資本関係から解放しなければならない。資本主義的大工業として物象化された搾取－被搾取の階級的支配関係を解消するためには，資本関係から大工業生産様式を解放しなければならない。それは人格の物象からの解放でもあり，マルクスの言う Individualität の確立でもある。浅見は「客体に解消されてしまった他者との社会的関連を，意識的な関連における主体の存立の問題として，換言すれば個人の直接的な存立根拠の問題として把握し，ブルジョア的な主－客分裂の絶対化を超克せんとするもの」であるととらえる[24]。客体的生産条件を意志的に支配し，主－客の統一において人間が自立性を維持する状態を回復するのである。意志的支配という活動において，社会的共同意志と労働者の個別的意志とを過程的に統一することによって，社会的所有における「個人的自立性」＝「自己再生産の根拠」を確立するのである[25]。

人間性と人格の解放のために，資本の物象化から大工業を社会的に解放するとともに，人間の人格を事物的依存関係から解放し，労働の主体として自立化させ，労働条件を社会的にも個人的にも意志的に支配する新たな人間関係を確立する必要がある。

しかし，それは労働者を「総体的所有者」として生産条件を所有させるだけで，個々の労働者の所有を否定する体制ではありえない（かつての「社会主義」の生産手段の国有，協同組合所有）。また，企業ごとに生産条件と労働者の意志的支配を確立するだけで，社会全体の労働過程の意志的支配を放棄する体制でもない（ユーゴの自主管理）。「労働者諸個人自らが，社会的生産過程全体

を対象とする管理意志を集中・統一する過程的行為を行わねばならない」「決定的なのは，労働者の管理能力，殊に社会経済的管理能力の発展である。」[26]と浅見は主張する。

こうして人間性と人格を回復した個人を基盤にして，類的本質としての人間社会の共同性が意識的に回復，維持されるようになる。

芝田は大工業が生みだす「普遍的生産力」と「社会的個人」が価値法則の限界内に押し込められることにより，帝国主義段階で政治的・経済的・イデオロギー的にそれらがどのように現象するか，また人間性と人格がどのように破壊されるかを明らかにする。そして人間性と人格の解放のための階級闘争を生産的実践と政治的実践として論じている[27]。

芝田は，ブルジョアジーは人類の大多数をプロレタリアートに転落させ，かれらを犠牲にして大工業を，したがってまた技術・科学・社会的結合を発展させ，社会的労働の無限の生産力を強制的につくりだすが，そのことによってプロレタリアートを革命的階級として形成するとともに，すべての人間の個性の全面的発展が可能であるような「自由な人間社会の物質的基礎」を形成し，階級闘争そのものの止揚を可能にする前提条件を創り出すと言う。さらにブルジョアジーは，一方で人間を非人間化してプロレタリアートの欲望を無限に縮小させようとするが，他方では，プロレタリアートに自分の貧困を意識させ，自分の非人間化を意識させ，それゆえに自分自身を止揚する「内的必然性」をもって，必死の闘争にたちあがらざるをえないものとする。完成されたプロレタリアートはいっさいの人間性を奪われ，人間性の外見まで捨象されるにいたっているため，必然的に人間性と人格の解放のためにたちあがるのである。

こうして芝田は人間性と人格の解放の基盤としての階級の解放について論じている。しかし，疎外された個人としてのプロレタリアートの人間性と人格の解放と，階級としてのプロレタリアートの解放との関係が明示的に論じられてはいない。それは人権闘争の意義について，まったくと言ってよいほ

ど言及されていないことに現れている[28]。資本制生産が高度に発展し，資本関係が完全に人間たちをとらえればとらえるほど，個人の人間性が捨象されていく。そのような非人間化が逆に一人一人の人間に「人間的な生命発現の全体を要求する人間」として開花すべく「情熱」を持たせはじめるということは芝田の言うとおりである。その要求が基本的人権の獲得と豊富化の闘争として展開されてきたと言えよう。人権闘争はまさに商品関係，資本関係を創り出した搾取－被搾取の階級関係を解消する階級闘争の重要な一形態なのである。

資本制的大工業の生みだす資本関係が個人を絶対的無内容の関係にますます押し込め，個人としての生存権の承認を最低限の「絶対に有無をいわせぬ必要」[29]として個人の自我に自覚させる。さらにそれぞれの個人が，経済的にも，政治的にも人間性と人格の疎外を自覚せざるをえず，個人の経済的諸権利，政治的参加の諸権利の主張の必然的発展と共生の必要を自覚せざるをえないのである。自我は「人間的な生命発現の全体を要求」[30]しはじめる。この人権闘争と階級闘争の関係を考えてみたい。

〔注〕

1) 芝田進午『人間性と人格の理論』(青木書店，1961年)。
2) 同上，129頁。
3) 同上，131頁。
4) 同上，134—136頁。
5) 同上，135頁。
6) 同上，160—161頁。
7) 同上。
8) 浅見克彦『所有と物象化』(世界書院，1986年) 202頁。
9) 同上。マルクスは本源的所有について論じながら次のように言っている。
「所有とは，ある種族（共同団体）へ帰属すること（その中で主体的，客観的存在をもつこと）であり，そしてその共同団体の，土地，その非有機的身体である大地に対する関係行為を媒介にしての，個人の土地に対する関係行為，彼の個性Individualität に属する前提条件，個性の定在様式としての生産の外的な原初条件……にたいする関係行為のことである。」(*MEGA*. II/1.2, S.396)

10) 芝田，前掲書，161 頁。

11) 「みずから働いて得た財産」が現実に通用したのは，商品交換発展以前の人間の原始的社会においてのみであったことは明らかである。

12) マルクス・エンゲルス全集『資本論』Ia（大月書店，1965 年）100 頁。

13) 芝田，前掲書，164—165 頁。

14) マルクス，前掲『資本論』152 頁。

15) 芝田，前掲書，183 頁。

16) 同上，184 頁。

17) 浅見，前掲書，82—83 頁

18) 芝田，前掲書，184 頁。

19) 同上。

20) 同上，第 8 章，3 大工業，参照。

21) 浅見，前掲書，180 頁。

22) 芝田，前掲書，202 頁。

23) 同上，第 8 章，C 大工業とその資本主義的形態の矛盾，参照。

24) 浅見，前掲書，204 頁。

25) 同上，206 頁。

26) 同上，218 頁。

27) 芝田，前掲書，第 9 章以降，参照。

28) 芝田は核兵器禁止運動やベトナム戦争の現代的意義を研究するなかで，「生きる権利」に注目し，アメリカ革命と人権闘争の発展のかかわりを研究し，現代社会における独自の人権闘争の意義を展開している。

芝田進午編著『人間の権利　アメリカ革命と現代』(大月書店，1977 年)。

Singo, Sibata. "Toward a New Philosophy of Human Survival, The Contemporary Significance of the US Declaration of Independence for the Philosophy of Our Times", (Submitted to the World Congress of Philosophy. Boston. 10–16.8. 1998)

29) 芝田，前掲『人間性と人格の理論』318 頁。

30) 同上。

〈市民社会〉

1. イデオロギッシュな市民社会

廣松渉はイデオロギッシュな市民社会像を次のようにまとめている。

独立自営の農民，自営の手工業者，商人たちによって構成され，各自が自分の労働にもとづく生産物を等価交換しあう市民社会には，分業で効率的に富を生産し，商人が生産物を効率よく再分配する経済合理主義的制度が成立する。この市民社会には経済外的な論理で収奪する特権者が存在せず，市民たちがあくまで自律的・対等的にもっぱら自発的等価交換によって富の相互補完的移動と活用をおこなう「全面的商品経済社会」であると表象される[1)]。

廣松は，労働者も一種の自営的な商品生産・所持・取り引き者としての市民ということにされ，資本家もそれに応じて，労働力という他人の所持する商品の購入者という扱いになると言う[2)]。

「こうして，資本家と労働者との関係を含めて，近代社会における人間・社会関係は，自律的で平等な諸個人の，対等な自発的商取引の互酬的関係だと『理解』され，古代や中世の身分的に不自由・不平等で，強制・隷従の社会関係とは決定的に『相違』する近代的市民の相互利他的な関係とやらが，自画自賛され，それが社会科学のヒュポダイムにまで浸透している始末でした。――それは単なる過去の遺物ではなく，マルクス以後の今日においてさえ，依然として有力なイデオロギーを形作っております。――

マルクスが『資本論』において開示したかった重要な意想の一つは，こういう『近代的市民社会像』のイデオロギッシュな自己欺瞞性を，資本制社会の構造を実態分析してみせることで，完膚無きまでに暴露することに

ありました。」[3)]

廣松の指摘するように，マルクスは物象化に支配される社会を市民社会ととらえている。その社会は市民社会と政治的共同体に分裂している。前者では人間は私人として活動し，他人を手段とみなし，自分自身を手段にまで下落させ，他の勢力の玩弄物となる。市民社会は「利己主義の領域，万人の万人にたいする闘いの領域」なのである。後者では人間は非現実的普遍性で満たされている。そこでは「他の人間と共同して類的存在としてふるまう」[4)]。

資本関係は，市場を媒介にした私的所有者の関係として現象する。実はこの私的所有という意識そのものの土台も，単純な商品交換に即して現れる物象に支配された意識であった。これは商品世界の所有権の成立の基盤であった。しかも貨幣は具体的諸労働の依存関係の痕跡を一掃している商品なので，貨幣の所有権としてしか承認しえない。さらに労働過程が資本に支配されると，資本は，労働過程とはなんの関係もない独自の存在である貨幣として現象する。こうして資本も所有権として承認されるようになる。だから資本関係は私的所有権の法的関係として現象する[5)]。

このような関係のなかで諸個人は商品関係，資本関係を次のように理解する。

「諸個人は，物象化に囚われて，経済的生活の再生産を保障する商品－貨幣関係を自然的に自明のものと前提して行為することにより，諸個人自身の行為の分裂性（孤立的労働）を自然的に自明なものとして」理解する。それによって各人は生活維持のために孤立的に労働し，その産物を私的に領有していく関連が自然的必然として現れる。かくて，「こうした生活過程の必然としての私的所有が自然的に自明な秩序，自然法として」理解される[6)]。このような私的所有権者として自立した個人により，市場を媒介にして形成された社会が「市民社会」であり，資本関係の社会である。

先にも指摘したように，資本関係の土台には敵対的・階級的支配－従属関

係があった。それは，一方の生産手段を所有する資本家階級による他方の生産手段から排除され，賃金労働を強制される労働者階級の搾取－被搾取の関係である。しかしこの階級的所有関係が直接的・暴力的支配－従属の関係として現象するのではない。それを土台にしながら，現実には所有権にもとづく資本関係の社会が現象し，制度化される。そこではすべての人間が市場をつうじて等価交換しながら市民生活を営む。だから市民社会の土台には敵対的・階級的支配－従属関係が本質的に存在していることを忘れてはならない。

2. 市民社会と階級

資本関係のなかで，所有する物件の違い，あるいはそのなかでの役割の違いによって，市民社会の市民を階級に分類することができる。しかし，そこで区分された階級はそれ自体として搾取する階級や搾取される階級ではない。

従来，資本制社会の階級は主に労働者階級，自営業者，資本家階級と区分された。

労働者階級には，いわゆるサラリーマン層（専門的・技術的職業従事者，事務従事者），生産的労働者層（農林漁業従事者，鉱工運輸従事者），不生産的労働者層（販売従事者，サービス業従事者），完全失業者が区分された。さらに資本家階級としては企業数を資本家の数とみなした。あるいは企業の役員数をそれに加えた。

こうした区分の資本家階級が搾取階級で，労働者階級は被搾取階級ということであった。そして資本家の所有する生産手段を社会的所有に転化することによって，搾取を廃止することができるのである。これがこれまで主張されてきた社会主義革命であった。

しかし，ここで区分された階級は資本関係における所有権や役割にもとづ

く区分であって，直接的搾取－被搾取の階級的支配－被支配の関係にある本質的階級関係の剔出ではない。資本関係に配置された市民を法的所有関係にもとづき区分し，その区別された集団を搾取－被搾取の関係にある階級とみなし，被搾取階級を解放しようとする。これは物象化に支配された階級闘争論である。

濱嶋朗は，剰余価値を生みだす生産的労働者を雑多な労働者から厳密に区分しようとするプーランザスに注目する[7]。それが厳密な意味で搾取されている階級というわけである。そこから排除された広範な中間層を「新しいプチ・ブルジョアジー」とする。プーランザスは「階級を基底（生産諸関係）に還元する経済主義の過ちを克服するために，経済的・政治的・イデオロギー的諸審級間の相互規定による構造的階級決定という見地」を提出したと濱嶋は言い，次のようにプーランザスの主張を評価する[8]。

「かれの階級分析は……経済的基準として生産的労働／不生産的労働の別を，政治的基準として管理・監督労働／非管理・監督労働の別を，イデオロギー的基準として肉体労働／精神労働の別を取りあげ，この三段がまえの分析手順によって広義の労働者階級から夾雑物を分離・排除するという方法をとった。こうした手続きをとおして，まず経済的には商業・サービス（および公務・一般事務）に従事する不生産的労働者が，ついで政治的には管理・監督労働に従事する経営者・中間管理者・末端監督者が，さらにイデオロギー的には精神労働にたずさわる専門・技術層（科学者・研究者・技師・技手など）をはじめとした一般事務従事者を含む広汎な勤労者が，母体である労働者階級から析出・排除され，それらの大部分が新しいプチ・ブルジョアジーを構成するものとされたのである。」[9]

濱嶋は，「かれの階級分析はより精緻となり，すくなくとも論理的には階級間の境界線は従来の階級区分よりも明確に確定されるという利点」があるとする。しかし，「労働者階級の構成比は2割ほどに激減して少数派に転落する反面，新しいプチ・ブルジョアジーは7割台をマークし，異常に肥大化

するという結果になっている」のは，プーランザスの階級分析の論理操作になんらかの欠陥があるからだと濱嶋は判断する[10]。

以上の観点から，濱嶋は「プーランザスのばあいには，経済的基準よりもイデオロギー的基準が事実上または結果的に優位に立たされ，労働者階級への所属決定がイデオロギー的基準によって事実上左右される，というきわめて不可解な処理がなされる」と批判する[11]。

そのうえで濱嶋は「集団的労働者」概念を提起する。その論理はおよそ次のようにまとめられる。

1. 資本主義的生産様式は，価値増殖過程と技術的・組織的労働過程との相対的統一を特色とする。
2. 生産的労働は，価値増殖過程との関係では経済的搾取をもたらすが，技術的・組織的労働過程との関係では不生産的労働にたいする経済的抑圧もふくめ「集団的労働者」を成立させる。複雑な労働過程のなかで生産的・不生産的労働にたずさわる人々が遂行する機能の総体を「集団的労働者の機能」と言う。
3. 「集団的労働者」の内部に生産的労働と不生産的労働にたずさわる二つの階層が分化する。それは資本家の管理・監督機能とされていた二つの機能，つまり，経済的搾取と抑圧の維持をはかる統制・監督機能および労働過程の調整・統一のうち，後者はほぼそのまま集団労働者の機能に移行し，さらにその過程をつうじて，生産的労働にたずさわって剰余価値を創出する人々（ブルー・カラー）と不生産的労働に従事して剰余価値の実現（剰余労働の創出）に貢献する人々（ホワイト・カラー）を析出する。
4. 二つのカテゴリーの労働者は，労働過程に働く技術的諸条件だけではなく，その調整・統一機能とも深くかかわりつつ，そこにしのびこんでくる社会的諸条件を介して，資本の管理・監督機能のもとに包摂され，資本主義的生産過程に編入・統合されることになる。これを資本の「包括的機能」と言う。

5.「資本の包括的機能と集団労働者の機能とは，独占資本主義の段階においては，ヒエラルヒー状に組織された複雑・精緻な『官僚制構造』を介して集団的に遂行されるわけで，このことは，労働過程の調整・統一機能および統制・監督機能が，もはや単独に（一人の資本家によって）ではなく，多数の人びとによって集団的に遂行されることを意味し，その結果，技術的分業と社会的分業とは資本の包括的機能遂行手段である『官僚制構造』において統合され，その構造の頂点に立つ経営者から末端の監督者（さらに一般従業員）にいたるまで，『地位のヒエラルヒー』が完成する。」[12)]

順次，問題点を指摘する。

第一。資本主義的生産様式は価値増殖過程と技術的・組織的労働過程の統一ではない。芝田の指摘するように，労働過程が技術的過程と組織的過程の統一なのである。この労働過程が資本主義的労働過程に転化すると，価値増殖過程として現象するのである。濱嶋の言う「相対的」統一とはどのような統一なのかはっきりしない。濱嶋のこの主張には，資本の物象化としての大工業生産様式の把握のしかたに混乱があることを示している。

第二。全体として意味のとりにくい内容であるが，複雑な労働過程を遂行する労働者を集団的労働者と概念化しようとしている。労働過程は大工業生産様式となっている。しかもそれが資本の価値増殖過程として物象化しているのである。事物的関係に転化している。単に労働過程を遂行するのではなく，その事物的関係に転化した資本関係を遂行する「集団的労働者」が現れているのである。濱嶋は物象に支配された現実を客観的存在と錯認し，これを「生産の社会化」による現象としてとらえる。かれの見ているのは単に社会化された生産ではなく，社会化された生産が資本の物象化により事物的関係に転化した世界である。資本の物象化の世界では，すべての関係が資本の機能の遂行として現象する。その点を見逃している。

第三。濱嶋は管理・監督・調整・統一機能を資本家の機能と考えている。

そして資本制大工業では，調整・統一機能が集団的労働者の機能へ移行すると言う。しかしこれまで見てきたように，マニュファクチュア段階まではまだ姿をとどめていた「資本家－労働者」の人格的権威－服従の関係が，資本制大工業では資本の管理・監督機能，調整・統一機能の物象化により，労働過程（諸個人から自立化している）そのものへの労働者の従属による秩序へ転化している。労働過程そのものの自然的必然として価値増殖過程が出現している。労働過程一般の管理・監督・調整・統一機能のもとで価値増殖過程が進行するのである。資本として物象化した労働過程を客観的・自然的過程と濱嶋は錯認し，そこに配置された「労働力」の担い手を区分して，管理・監督機能を遂行する資本家と調整・統一機能を遂行する「集団的労働者」に分けるのである。これはイデオロギー的意識による混同した概念化である。現実に存在するのは価値増殖過程として物象化した労働過程であり，そこに配置された労働者はすべて資本の機能を遂行しているにすぎない。管理・監督機能，調整・統一機能は労働過程一般の機能として現象している。それにもかかわらずイデオロギー的な目には，管理・監督労働は搾取する資本家の労働に，調整・統一機能は「集団的労働者」の一般的に遂行する機能に見えるのである。そしてさらに調整・統一機能を遂行する労働者は生産的労働者＝ブルー・カラーと不生産的労働者＝ホワイト・カラーに分離するように見える。

第四。こうして濱嶋は資本の管理・監督機能から排除されたブルー・カラーとホワイト・カラーを析出した。しかし物象化した資本関係のなかでは，かれらも「労働力」としてしか存在しえない賃金労働者である。かれらも資本関係のなかで価値形成過程の担い手として機能しているのである。物象化された関係のなかで個体を裸のままで取り出し，それがただ一個の人間に見えようと，それは資本の物象の一つである。どんなにひねくり回しても抽象的労働の塊には見えない。それは機械をどんなにひねくり回しても，資本であるということが，それ自体からはわからないのと同じである。管理・監督機能から排除された労働者は，これまで述べたことからわかるように，最初

から資本関係のなかに包摂され「労働力」として物象化した個体である。それを濱嶋は単なる人間個体と錯認し，「しのびこんでくる社会的諸条件を介して資本の管理・監督機能のもとに包摂」されると考える。はじめから包摂されている個体をここではじめて包摂されると理解する。そしてこれを資本の「包括的機能」とする。かれは二重に資本に包摂したことに気がつかない。

第五。濱島の言う「資本の包括的機能」によって，このような「地位のヒエラルヒー」が生じるのではない。それはこれまで述べたことによって明らかである。大工業が資本の価値増殖過程として物象化して現れることこそ，いわば「資本の包括的」作用である。資本制的大工業の労働過程が「地位のヒエラルヒー」として組織される時に発生する人間性と人格の破壊について，これまで多くの研究者が明らかにしているところである。

以上のように濱嶋の「集団的労働者」概念には，資本関係の物象化を考慮にいれていないことから生じる混乱が見られる。

この混乱はそのままかれの新中間層論に持ち込まれる。

3. 新中間層と市民

ここで資本の物象化を無視した階級論として最近流行の新中間層論を検討する。これは発展途上諸国にも大きな影響を与えているイデオロギーである。

濱嶋は，プーランザスの新プチ・ブルジョアジーの概念を批判して「新中間層（ホワイトカラー）の階級的地位を経済的に確定」しようとする[13]。かれが析出した新中間層とは，先に批判したように資本関係に配置された市民の所有権と資本関係における地位による区分でしかない。

階級を「経済的」に確定するということで濱嶋の意味するところは曖昧であるが，おそらくプーランザスの失敗から学び，政治的・イデオロギー的審

級を階級概念から排除したということであろう。問題は，階級区分の基準が「経済的」であるかどうかにあるのではない。階級社会としての資本制社会における敵対的支配－従属の階級関係の把握の方法にある。物象化した資本関係の社会における階級関係の把握に失敗すると，資本関係による社会関係を人的依存関係と錯認し，その関係から政治的・イデオロギー的関係を排除すると経済的関係が現れると錯認し，私的所有権の関係を経済的関係と錯認し，それによる区分で階級関係を把握したと錯認することになる。

濱島によると，新中間層とは次のように規定される。

1. 法的にも経済的にも生産手段を所有せず（経済的の意味が曖昧である。経済的所有とは何を意味するのであろうか――河合），
2. 資本の包括的機能と集団労働者の機能とを同時に遂行し，
3. それゆえ労働者であるとともに非労働者であり，
4. 搾取者（または抑圧者）であるとともに被搾取者（被抑圧者）である。

そして「生産手段を所有しないのに資本の包括的機能を遂行し，しかもこの機能を集団労働者の機能と関連して同時に遂行するというところに，新中間層の本質がある」とし，「一方で労働者であり被搾取者でありながら，他方で非労働者であり搾取者であるという，二重の性格を帯びさせることになる。」[14)]

濱島は「新中間層」の性格をこのようにとらえている。しかし資本関係に配置されたすべての個人は多かれ少なかれこのような二重性を持っている。労働力を販売せざるをえないこと自体がすでに資本関係への包摂である。搾取－被搾取の関係が物象化した資本関係からなる社会体制の維持に賃金労働者は包摂されているのである。自分は管理・監督労働をせず，他人を搾取していないと，雇用された単なる賃金労働者が感じるのは物象とイデオロギーに支配された意識による。かれも事物的関係の体制として存在する搾取－被搾取の関係に入り込んでいることに変わりはない。搾取に積極的に荷担はし

ていないと主張できる程度である。自分自身を搾取する体制を自分で維持しなければ生きていけないシステムが資本関係の市民社会である。

濱嶋は新中間層の析出をし，その頂点に近づけば資本の機能が支配的であり，底辺に近づけば単なる労働者の傾向を強めると感じている。しかし，資本関係のなかでは単なる労働者も資本の機能の遂行者である。

資本関係に規定された市民が事物的依存関係にもとづき構成する市民社会には「地位のヒエラルヒー」が築かれ，その上位には，「資本関係のあり方」＝「搾取と分配のあり方」を決定する集団が現れるのである。いわゆるホワイト・カラーもそれ自体，地位のヒエラルヒーで構成され，その上位は資本関係のあり方についての決定権の一翼を掌握する。

これは人格的依存関係の支配した時代の資本家階級ではないことに注意する必要がある。この「資本関係のあり方の決定集団」は，政治・軍事・経済・社会・文化・イデオロギーのすべての分野で，搾取と分配のための政策決定権を掌握する，いわば「決定権掌握集団」であり，資本の人格としての市民集団なのである。かれらも市民社会の分業で一定の役割をはたす市民として存在し，さまざまな経路をたどって，それぞれ地位のヒエラルヒーを上昇し，決定権掌握集団のなかに入り込んでいくのである。これらの決定権掌握集団はたえず新しい人材で置き換えられていく。この集団は直接，資本家階級ではない。資本の意志を実現する市民集団である。

濱嶋もプーランザスも伝統的マルクス主義の階級概念に疑問を持ち，その再検討に悪戦苦闘している。しかし，かれらも資本の物象化にまどわされ，人的依存関係と事物的依存関係の現象をごちゃまぜにし，混乱におちいっている。

新中間層をとらえようとする努力はまた次のような見解にもなる。

「新中間層」を市民として，労働者階級と区別し，市民の増加する資本主義の傾向をとらえて，それを市民社会の到来とする。それによって民主主義が根づくのである。

例えば韓国で近年，重大な実践的関心事として「新中間層」の問題が浮上していると文京洙は言う。文は徐寛模の階級論に注目する[15]。徐は「賃金取得中間層」（公務員・警察官・職業軍人・民間企業の中・下級管理職・大卒の事務職員・販売職・技術職）と「インテリ層」（教員・科学者・技術者・医者・宗教人・言論人・弁護士・薬剤師）とを「新中間層」として「労働者階級」とは区別する。かれによると変革の主体をなすのは階級それ自体ではなく，階級の境界を超えた実践的な能力である。その階級を超えた変革の主体が新中間層である。

ここにはプーランザスや濱嶋と同様の混乱が見られる。徐が区分したのは，資本関係として物象化している市民社会の市民の区分である。それを階級と錯視している。さらにそのうえで労働者階級と「階級の境界を超えた実践的能力」とに区別する。かれが「実践的能力」から排除した「労働者階級」は労働力の私的所有権者であり，新中間層と同様に資本関係に取り込まれた市民なのである。

徐は，労働者階級のヘゲモニーという史的唯物論の基本命題に挑戦しているつもりであるが，これでは資本の物象化にとりつかれた混乱であるにすぎない。労働を不当に搾取する階級的所有関係が資本関係の根底に本質的に存在していることを徐は無視する。この労働者階級の解放とそのヘゲモニーの確立は依然として史的唯物論の基本命題である。

新中間層を変革主体とする徐の見解に多少疑問を感じている文は労働者階級を，第一に上層の新中間層，第二に生産職を主体とする下級事務職を含む中核的労働者，第三に都市貧民などの下層労働者に分類する。これらが市民社会の市民であり，農村や都市の旧中間層をはさんで資本家階級と対峙すると文は言う。しかし，これは従来のスターリン主義の階級と階層の区分の域を出ないだけではなく，市民を資本関係のもとで区分している点で徐と変わりはない[16]。

4. 新中間層の市民運動

この新中間層論は市民運動論としても展開される。シン・ジボは言う。

「社会主義の核心が私的所有の廃止にあるとすれば，これからの遠大な歴史発展のあとならいざ知らず，これから相当の期間は不可能であると。したがって，それを信奉もせず，行動に移しもしないという点で私は社会主義者ではない。」

シン・ジボはスターリン主義の生産手段の社会的所有としての国有化と社会主義を同一視し，それと決別することにより，資本の物神性に支配された私的所有を肯定するという混乱におちいっている。

シン・ジボは「新しい経済観は市場の廃止ではなく，より高度な物質的幸福と公正な分配のために市場を利用し管理するものでなければならない。すなわちそれは市場の効率性を通じた経済成長と公正分配，環境保全という社会進歩の課題を新たな次元で調整，統制するものである。」そのためには「民主的で進歩的な権力」が必要だと言う。

資本制の私的所有権から人間を解放せずに「公正な分配」があると信じるのは自由であるが幻想である。市場経済の効率性と「公正な分配」の両立は不可能である。

シン・ジボは何を目標に行動するか。「不完全な人間をモデルとして現実に可能な変化のあり方を探求していきたい。」

現実に可能な変化のあり方とは何か。「不完全ではあるが改善可能な人間像」にもとづく新しい進歩理念である。

どのように新しいか。「市場経済の効率性を基本とすることが必須である。」

この主張のどこが新しいのか。ブルジョアの出現と共に古いのではないか。市場経済で物象化する人間を解放する道筋が問題の核心である。そのこ

とをシン・ジボは無視する。市場の効率性で何を改善するのか。人間による人間の不当な搾取の体制を効率よく構成して何が改善できるのか。

現実の資本制社会では，「民主制」のもとで市場の効率性を維持し，社会の発展を企図する先進資本制諸国と，その結果として発展を阻止されている「発展途上諸国」がある。シン・ジボは発展途上諸国で市場の効率性を実現することにより，新しい進歩を達成できると言う。しかし，かれの主張は先進国入りをしようという主張と変わりない。効率のよい市場を利用して先進国入りが可能になったとしても，地球的規模で見れば，先進国入りを排除され，市場から排除された膨大な民衆を抱える国家はけっしてなくなりはしない。それは資本制生産では解決できない問題なのである。

シン・ジボは「権力の社会化」を主張する。「それを大衆の力によって下から組織していく過程を通じ，政治と市民社会の全面的な民主化を達成することにより，権力それ自体を民主的に新しく再編成することに重点をおく。」

大衆の力で下から組織する市民社会の全面的民主化と，私的所有と市場の支配する市民社会とは両立しないことにシン・ジボは気がつかない。あるいは気がつかないふりをする。韓国が先進国入りを達成したとする現実に目をくもらされ，あたかも地球上のすべての国家が効率のよい市場をつうじて，先進国入りできるかのような幻想にとらわれている[17)]。

マクファーソンは自由民主主義に代わる参加民主主義を提起する。つまり民主共和制をより民主的に改造しようと提案する。ただし，マルクスの考えた方策は放棄されなければならないと言う。そのマルクスの方策をマクファーソンは次のようにまとめている。

資本主義の発展が階級意識の先鋭化に導き，それが労働者階級の政治行動を生みだし，さらに労働者階級の階級意識をたかめ，それが革命的意識と革命的組織を生みだす。その結果として労働者階級による権力の革命的奪取が生じ，その権力はプロレタリア独裁の期間中強化され，その独裁は社会的・経済的な不平等を打ち砕き，消費者として極大化志向する人間をみずからの

潜在的能力の行使者・開発者としての人間によっておきかえる[18]。

このようにマルクスの考え方をまとめたうえで，今日，先進資本主義社会で労働者階級の階級意識が強まっている証拠はないとマクファーソンは指摘する。疎外感からの労働者の革命的労働運動は期待できない。労働者階級は，レーニンが労働組合意識と指摘した枠を超えたことはなかった。かれらは実質的所得の維持に，つまり消費者としての立場を維持することに腐心し，その枠をはみだすことはなかったと言う[19]。

それではどのような参加の形態が労働者の新しい意識をはぐくみ，消費者中心的志向，単なる物質的基準の充足という考え方から離脱した新しい人間を創出することができると考えられるだろうか。

マクファーソンのこれにたいする回答はきわめて悲観的長期的なものである。かれは各個人の思考様式の変化がなければ参加民主主義は発展しないし，参加民主主義が存在しない限り，個人の思考様式は変化しない。それはジレンマであると言う。この隘路から抜け出す道をかれは二つあげる。一つは，資本主義的発展そのものが人間の生活の有り様を再考せざるをえないように人間たちを追い込んでいること。生活の質の面からのコスト計算に関心が移りはじめていること。それはGNP拡大崇拝の見直しとして現れている。

もう一つは，職場や地域などで労働組合以外のさまざまな身近な組織や運動が発展しており，そのなかで自主的に決定し行動する経験を労働者が積み上げていることである。これはやがて政治的無関心を克服する基盤になるとマクファーソンは見ている。かれは，このような政治的・経済的経験が相互に作用し合って徐々に参加民主主義が発展していくと言う[20]。

そのうえでマクファーソンは新しい運動に注目する。環境運動，反公害運動，反核と軍縮運動，都市中心の空洞化に反対する運動，職場での参加を進める運動，労働者のコントロールないし産業民主主義，女性解放運動等々。これらの運動が資本主義になんらかの転換をもたらしうるかどうか，今のと

ころはわからない。これらの運動はこれまでの前衛主義とは異なり，すべて草の根の参加を重視する運動として展開されている。そしてこの運動の活力は労働者階級より，中産階級から出ている。なぜならこの階級は単なる物質的量よりも，生活の質のためにエネルギーを割く用意がある。これらの運動で社会変革がおこるとしても，きわめて長い時間がかかる。だからといって政治的権威が民主主義的過程を急がせることは危険である。前衛がわれわれよりもわれわれの必要を良く知っていると主張しはじめることは危険である。前衛にたよって進むより，前衛を欠いて進んだほうが基本的価値の達成という点で，より危険は少なくなる。これがマクファーソンの主張である[21]。

同様に，カニンガムもマルクス主義の反民主主義的性格をおよそ次のようにまとめる。

1. 労働者階級は普遍的階級であるから，その客観的利益が全人類の利益を代表する。だから労働者階級の大義を前進させることが進歩であるという階級還元論。
2. マルクス主義こそ普遍的世界観であるとする反多元主義的実践。市民社会への国家主義的攻撃の強化。
3. 前衛が特別の地位にあるとする認識。マルクス主義の世界観を身につけている人々こそが労働者階級の客観的利益を理解でき，かれらの利益を代弁することができ，労働者階級の世界史的使命の遂行を助けることができるとする後見主義。

カニンガムは，このようなマルクス主義の見解によると，民主主義をブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義に分け，後者をよりすぐれた制度と想定し，後見主義者が人民の意志に沿わない行動をとっておきながら，民主主義的行動をとっていると主張しうることになると言う[22]。

以上のマクファーソン，カニンガムの主張は，崩壊した「社会主義」の現実に鑑みて，非常に説得力がある。

しかし，労働者階級にたいする不信と中産階級に希望を託す参加民主主義

に展望があるだろうか。

かれらも資本関係として物象化した市民社会の解放を従来のスターリン主義的階級論の立場から論じている。新しいのは労働者階級ではなく，新中間層が社会変革の中心になるということである。しかし，その階級区分がスターリン主義の痕跡を残しているのである。カニンガムは社会主義の失敗の現実から学び「一定の物質的便益と負担の平等」[23]が社会主義だと言う。しかし，市民社会の搾取と被搾取の階級関係をどのように解消できるのか。これが依然，疑問として残されている。

5. マルクス主義と民主制

マルクスとエンゲルスは，19世紀前半のヨーロッパで人民主権の民主共和制の樹立を主張していた。しかし，イギリスの例を見れば，普通選挙制による民主共和制の樹立は困難をきわめたことがわかる。ベンサムは，貧乏人が選挙権を用いて財産を平準化したり破壊したりしないと確信するにいたって普通選挙権の主張をするようになったのである。資本関係が人間の意識に与える効果をベンサムは敏感に感じ取ったと言ってよい。

当時，民主共和制の経験はまだ浅く，貧しい人々の代表が選挙をつうじて議会に進出できる状況ではなかった。それでもチャーチスト運動のような民衆の政治参加の要求が強まり，政治は民衆の要求を無視できなくなっていった。そのような事情を反映し，ブルジョアの指導のもとに成立してきた議会制度に革命的民主勢力が不信感を持ち，それをブルジョアのおしゃべりの機関と考えたのは当然であった。その当時でもマルクスやエンゲルスは民主共和制を労働者階級のための最良の政治形態と考えていた。

マルクスは19世紀後半のパリ・コミューンの経験をふまえて，民主共和制をより民主的な人民的な制度に改造する方策として，プロレタリアートのディクタトゥーラを主張した。これはかならずしも民主共和制を放棄する主

張ではない。しかし，ブルジョア国家はブルジョアジーの階級支配の道具であり，プロレタリアートを含む全人民を搾取する機関であり，階級として組織されたプロレタリアートがブルジョアジーの支配を覆し，民主主義を闘い取ることによってプロレタリアートの政治支配を打ち立て，人民の支配を実現することができると，多くの人々はマルクスの主張を理解した。特に議会制度にたいするマルクス主義者の批判は厳しかった。

レーニンは議会制度のない民主主義を考えることができると強調した。しかし，かれは代議制度のない民主主義は考えられないとも言った。ここにはプロレタリアートのディクタトゥーラと代議制度の関係がいかにあるべきか，また議会に代わる代議制度はいかにあるべきかという問題が含まれていた。これはまた議会選挙ではなく，武力革命で成立した民主主義をめざす革命政権が，プロレタリアートのディクタトゥーラと民主的代議制度をいかに制度化するかという問題でもあった。

パリ・コミューンはその教訓を残すにはあまりにも短期間につぶされてしまった。ロシア革命は，当時の内外情勢に影響されて，自由民主主義を廃止し，ソビエト制度を樹立し，その原則として民主主義的中央集権制を宣言した。しかし，その70年余の歴史は民主主義的中央集権制の代議制度を実現することなく終わった。そのうえ，民主主義的中央集権制はスターリン主義と同一視され，非民主的制度と思い込まれるにいたった。しかし，民主主義的中央集権制はいまだ現実的に試みられてはおらず，民主的制度の一形態として検討されるべき課題を残したままである。

現在では，マルクスやエンゲルスが普通選挙権にもとづく民主共和制を重視したことだけを強調してもあまり意味がない。またパリ・コミューンを経験したかれらが民主共和制について「あくまでもブルジョア支配の最後の形態，ブルジョア支配が没落してゆく形態である」とみなしていたにもかかわらず，かれらが議会制民主主義の確立を重視していたという点だけを強調することで済ますわけにはいかない[24)]。なぜなら社会主義をめざしたマルク

ス主義の政権がことごとく民主共和制の確立に失敗しているからである。

一方，民主共和制を維持して社会主義をめざしたチリのアジェンデ政権は，帝国主義者およびそれと手を結ぶ反動勢力によって暴力的に壊滅させられた。また武装闘争によって民主的過渡期革命政府を樹立したニカラグアのサンディニスタ政権は，民主共和制に移行することに成功したが，それは同時にサンディニスタが政権を失う過程でもあった。

キューバでは独特の試みがおこなわれている。これについてはすでに論じたので，ここでは詳しくは立ち入らない[25]。そこでは自由な政党結成は禁止されている。政党は共産党だけである。しかし代議制度の確立のための選挙に政党からの立候補は認めない。人物中心の複数立候補制にもとづく普通選挙で代議制度が樹立される。その過程をつうじて共産党員が権力を掌握する結果にはなっている。長期にわたってアメリカが干渉する状況のもとで考え出された独特の制度である。キューバ共産党は国民の平等を重視する政策を放棄しないと主張する。具体的には貧困者を見捨てないということである。しかし，世界中が利己主義的に組織されているなかで，キューバだけが国民の平等を維持するのは，至難の技である。しかもアメリカの干渉のなかでさまざまな妨害を受け，キューバ自身が貧困から脱出できないようにされている。このような状況はキューバ国民に多大の犠牲をしいることになっている。そのため国民の不満も大きい。

以上のことからわかるように「プロレタリアートのディクタトゥーラ」を維持しつつ，民主共和制を実現した例は皆無なのである。

このような歴史は，われわれに次のことを示している。資本の物神性を意識的に克服した「前衛」が階級を廃止し，民衆を教育することによって，新しい民主的人間を形成し，自由民主主義とは異なる「真の民主制」を形成した例は無いということである。スターリン主義との闘いは，なんらかの新しい民主制を創り出すことなく，自由民主主義へ転化した。

〔注〕

1) 廣松渉『今こそマルクスを読み返す』(講談社，1990年) 76—77頁。
2) 同上，79頁。
3) 同上，80頁。
4) マルクス『ユダヤ人問題によせて』マルクス・エンゲルス全集，第1巻，398頁。
5) 浅見，前掲書，第二章 商品の物神性と私的所有，参照。
6) 浅見克彦，鷲田小弥太他『人間社会の論理 ホッブズ・スピノザ・マルクス・ルカーチ』(青弓社，1985年) 59頁。
7) 濱嶋朗『現代社会と階級』(東京大学出版会，1991年) 第五章 二 ネオ・マルクス派の階級分析と中間層問題，参照。
8) 同上，162頁。
9) 同上，163頁。
10) 同上，163—164頁。
11) 同上，165頁。
12) 同上，169—171頁，参照。
13) 同上，171頁。
14) 同上。
15) 鄭章淵，文京洙『現代韓国への視点』(大月書店，1990年) 161頁。
16) 同上，162頁。
17) 月刊『社会評論』日本語版1993年6月号所収，シン・ジボ「あなたはまだ『革命』を夢見ているのか」144—145頁。
18) C. B. マクファーソン (田口富久治訳)『自由民主主義は生き残れるか』(岩波書店，1978年) 166頁。
19) 同上。またカニンガムも同様の見解を展開している。F. カニンガム (中谷義和訳)『現代世界の民主主義 回顧と展望』(法律文化社，1994年) 27—29頁。
20) マクファーソン，前掲書，V モデル4参照。
21) 同上。またカニンガム，前掲書，31—33頁。
22) カニンガム，前掲書，42—43頁。
23) 同上，66頁。
24) 不破哲三『科学的社会主義における民主主義の探究 マルクス・エンゲルス・レーニンの活動から』(新日本出版社，1990年) 参照。
25) 拙稿「社会主義の政治学的再検討」『岐阜経済大学論集』第28巻 第2・3号，同「苦悩するキューバ革命」『歴史学研究』第661号，1994年8月。